

誰でもできる

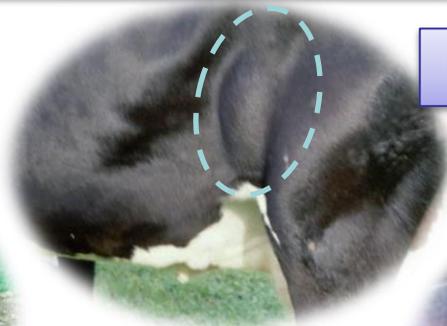
# 牛伝染性リンパ腫（BL：旧牛白血病）対策

## 症状を知ろう

（発症すると…）



急に痩せてくる  
元気・食欲なし



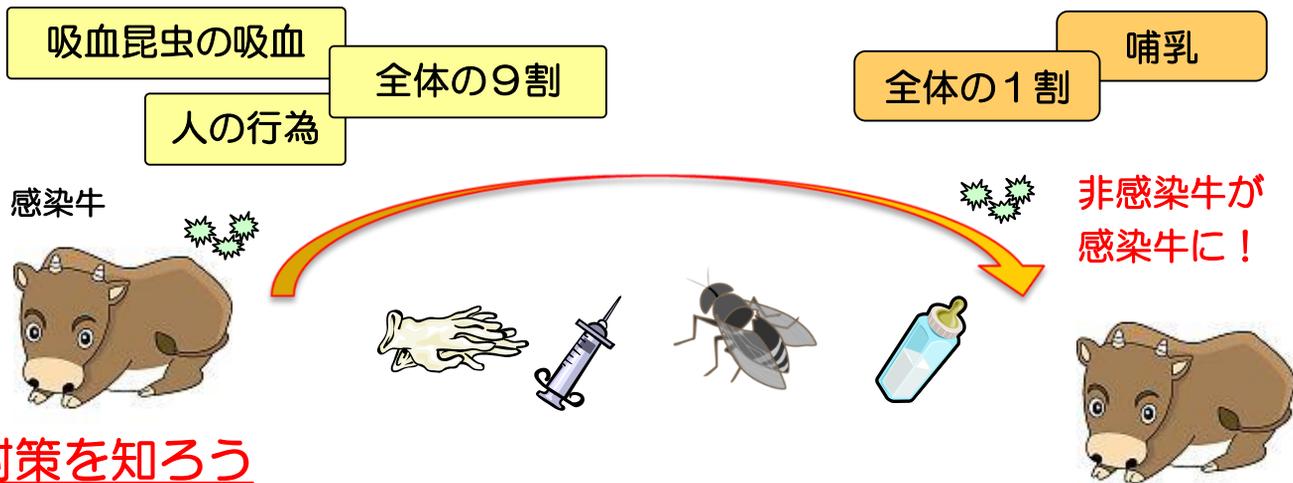
リンパ節が腫れる



眼がとび出る

## 原因を知ろう

血液や乳汁にあるBLウイルスが悪者！



## 対策を知ろう

### 人の行為

- 血液等が触れる資機材（注射針、直腸検査手袋、除角器、耳標パンチャー）の1頭毎の交換・洗浄・消毒
- 非感染牛を先に搾乳（乳牛）

### 吸血昆虫

- 網目5mm角程度の防虫ネットを牛舎出入口や窓に設置
- 分離飼育**（感染牛を離す、間に防虫ネットを設置）
- 薬剤駆除、トラップで捕獲
- アブ防除ジャケット**を活用

### 哺乳

- 初乳の加熱処理（60℃・30分）
- 初乳の凍結処理（一度完全に凍結）
- 非感染牛の乳
- 初乳製剤
- 人工哺乳

# 分離飼育のやり方は？

吸血昆虫の移動距離（4m以上確保）を長くしたり、移動を制限することで、血液中ウイルスの感染力を奪うことができます。



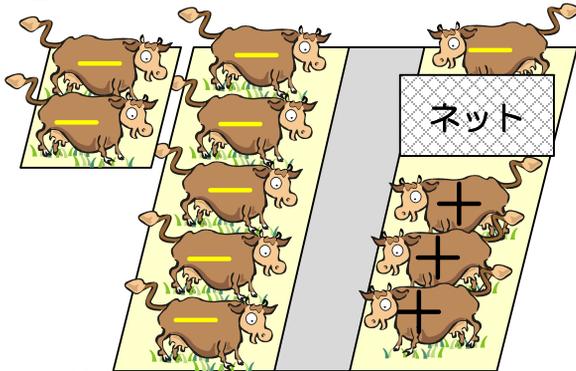
分離飼育の実施事例（酪農場）  
非感染牛と感染牛の間を、4m以上の距離を空けて、さらに間に防虫ネットを設置

## point

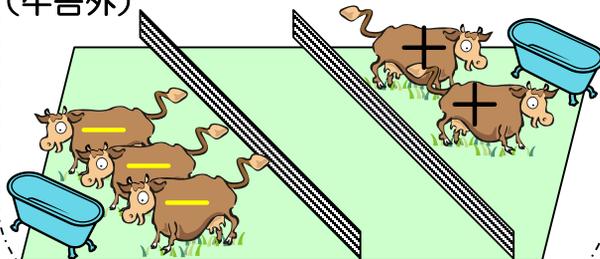
- ✓ まずは血液検査して、感染牛を把握。
- ✓ 非感染牛と感染牛を別の牛舎で管理する。
- ✓ 同じ牛舎内なら、離れた場所に並べ替えて、防虫ネット（網目は5mm角）を設置する。
- ✓ パドックや自家放牧地などの屋外では、牧柵などで完全に仕切る境界部や給餌・給水場所を離して配置する。

非感染牛（-）を  
感染牛（+）から離して管理

（牛舎内）



（牛舎外）



アブ防除ジャケット使ってみませんか？  
～分離飼育できないと諦めていませんか～

青森県での報告事例を参考に、

防風ネットで作ってみました！

こんな時に…



母牛

分離飼育  
できない

母子分離  
できない・  
したくない

パドックが  
1か所だけ  
運動させたい



育成牛（6か月）

# 子牛を管理するときの注意点は？

- ◆ 感染母牛から生まれた子牛は、出生時感染していないことが多い。
- ◆ 感染母牛からの哺乳や同居中のアブの吸血により、感染することがある。
- ◆ 子牛はできるだけ早く離乳し、感染牛（母牛含む）と接触しないよう、確実に繋ぎ、馬栓棒などの仕切りを低い位置に設置する。

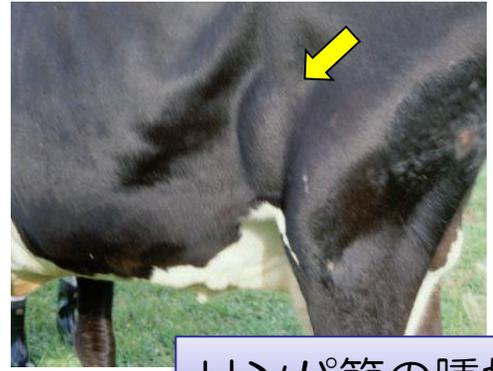
できることから、継続的に取り組みましょう。少しの工夫で損失を防止！

BL対策を応援します。まずはご連絡を！ ☎0197-23-3531

## 参考資料

### 牛伝染性リンパ腫（成牛型）とは？

- ◆ BLウイルスが原因。
- ◆ 発症すると、全身に悪性腫瘍。
- ◆ 感染牛のうち、5%未満で発症。
- ◆ 感染後3～4年の経過で発症。
- ◆ 生涯、ウイルスを持つ。
- ◆ 治療法、ワクチンなし。



リンパ節の腫れ

### 症状は？

- ◆ 削瘦、元気消失、食欲不振、乳量減少、下痢、便秘、リンパ節の腫れ、眼球の突出など。
- ◆ 骨盤腔内の腫瘍は直腸検査で発見されることも。
- ◆ 外見は無症状でも、と畜場で発見されることも。
- ◆ 発症牛は、数週間～数か月で死亡。



削瘦

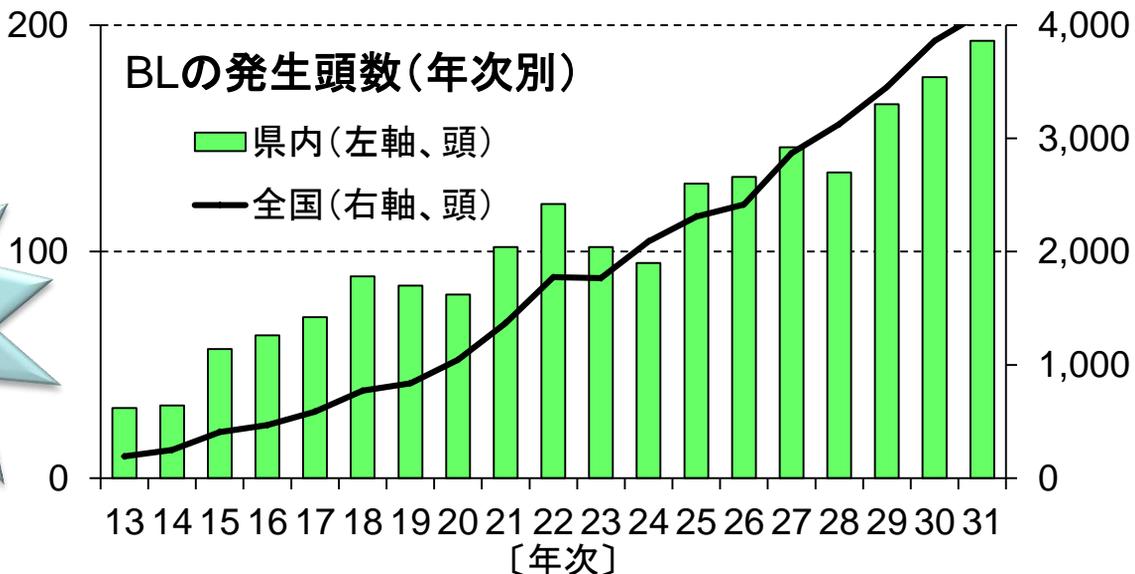
### どうやって・どの程度で感染する？

- ◆ ウイルスは、感染牛の血液や乳のリンパ球に存在。
- ◆ ごく微量の血液（1ul：1mlの1,000分の1）で、感染成立。

### 発生状況は？

- ◆ 全国的に発生頭数増加、  
4,110頭（H31）。
- ◆ 県内は、193頭（H31）。
- ◆ R2（年次）県南地域では、  
154頭発生。

R2年次 発生頭数	黒毛	ホルス	合計
県南	123	31	154
①一関	47	4	51
②奥州	35	3	38
③遠野	23	4	27
④金ケ崎	5	15	20
⑤花巻	5	2	7



年間損失  
約1億円  
(県内)

# 分離飼育の感染防止効果

◆ 高い感染防止効果が期待できる分離飼育方法は、

- ① 非感染牛を感染牛と別の牛舎で管理  
又は
- ② 非感染牛と感染牛を、並べ替えて、防虫ネットを、  
開口部（出入口・窓）と非感染牛の周囲に設置

〔 専用牛舎の設定 〕



〔 防虫ネットの設置  
（出入口、窓） 〕



〔 防虫ネットの設置（牛舎内） 〕



〔 防虫ネットの設置（牛舎内） 〕



◆ 分離飼育実施農場（29戸4グループ）を比較・分析

◆ 非感染牛を牛舎内で管理した場合（A～C）が、

牛舎外内の両方で管理した場合（D）より良好

◆ 非感染牛を専用牛舎や防虫ネットを用いて閉鎖的に

管理した場合（A、B）が、開放的に管理した場合（C）より良好

グループ （農場数）	分離飼育方法		感染防止率
	非感染牛の 管理場所	非感染牛の分離状況	
A (5戸)	牛舎内	専用の牛舎に収容し、感染牛と同居させずに管理（分娩等の一時的な移動を除く）。	97 % (34/35頭)
B (11戸)	牛舎内	感染牛と同じ牛舎で並べ替え、閉鎖的に管理（一部を専用牛舎に入れたり、出入口、窓、非感染牛の周囲に防虫ネットを設置）。	91 % (130/143頭)
C (4戸)	牛舎内	感染牛と同じ牛舎で並べ替えたが、ロールカーテンを開けるなど開放的に管理（専用牛舎での管理や防虫ネットの設置は未実施）。	83 % (24/29頭)
D (9戸)	牛舎外・内	牛舎外は、感染牛と異なる区画（隣接または数メートル隔てたパドック等）で管理。 牛舎内は、グループCと同様に管理。	74 % (98/133頭)